「我が人生思い残すことなし」(前編)

作：北郷遥斗（きたごう はると）

※ 前回までのあらすじ ═══ 神戸大空襲の後、きみ一家は広島の実家を頼って疎開した。だが、昭男一人は残り、戦場に出征出来る日を夢見て、日々空腹と空襲に耐えながら戦況を気にしていた。そんな時、ふと。今は失踪中の父の、これまでの苦悩の半生を想ったりした。═══

（尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。www.kyodo-keiei.co.jp

6. 再会

昭和20年7月に入って、再び空襲が激しくなり、今度は地方都市を中心に、毎日のようにが迫る様になった。ただ、以前の様に一度に何百機もの編隊で何時間も爆撃し続けるのではなく、せいぜい数十機程度で短時間に襲撃して戻っては、また翌日にも攻撃して来ると言った感じだった。「きっとさらに近くに敵の基地が出来たな。」「戦艦大和もとうに沈められたらしいで。」近所の「おやじ」が確信を持って言った。昭男は一層不安になった。『あかん。何んとかあと4週間・・・。間に合ってくれ・・・。7月28日になったら俺は15才。そうすれば帝国軍の教育隊に志願出来る。』

昭男の生きがいはもうそこしかなかった。軍隊に入って「名誉の戦死」以外に生きてる意味などなかったのだ。「灯火管制」の下、食事らしいものもなく、一人薄暗い家の中で思いを巡らせている時、表で物音がした。

『人の気配や。』昭男は一瞬『ドキッ』とした。というのも、以前父がまだこの家に居た頃、眼光の鋭い男たちによく見張られていたことがあるからだ。「憲兵や。」父がその度に吐き捨てる様に言っていた事がある。「戦争になったら悪い人やのうて、正しいもんが捕まるようになる。」父は短く説明した。それからしばらく経って家を出て行った。『そうか・・・。だからおれら家族が巻き込まれんようにおらんようなったんか・・・。』昭男は初めて父のほんとうの気持が分かり始めたような気がした。確かに、それからはその「憲兵」らしい人は現れなくなった。『いや、きっと近所の誰かがなんか食べもん持って来てくれたんかな。』昭男はすぐに思い直した。よく一人でひもじい思いで住んでる昭男を気使って、誰かれか、野菜や石鹸等をもらう事がある。

昭男はその内、玄関の引き戸が開くのを待った。鍵はかけてない。取られる物も、惜しい命もないからだ。だが、しばらく経ってもその戸は動かなかった。『おかしいな・・・。気のせいかな。』昭男は意を決して玄関に出て見た。そこにはぼんやりと月の光を背に人の輪郭だけが眼に映った。

「だれや。」昭男が小声で問いかけた。「久しぶりやな。」『えっ、まさか。』返ってきた声はまさしく父だった。「元気やったか。」続けて声がした。『今さら何言うてんねん。』すぐに腹立たしさが込み上げて来た。「沖縄取られたで。」「なに？」ようやく声に出せた。「アメリカがな、沖縄占領しよってん、全滅や。軍人だけやない。住民も4人に1人が死んだらしい。中には日本軍に殺されたもんもおるらしいわ。」「今、でかい飛行場作っとるさかい、そっから毎日何百機のB29で皆殺しにされるで。今までとは比べもんにはならへん。」「本土決戦言うたかて、日本はもう空では戦えん。飛行機ももう全部特攻で潰した。負けや、勝てへん。」「去年イタリーが降伏しよったんは知ってるやろ。今度はドイツや。先月ヒトラーも自決しよった。三国同盟で残ってんのは日本だけや。しゃあけど軍は引き下がりよらへん。一億玉砕までやる気や。お前らも早よ逃げたほうがええ・・・。」『何、言うとんねんこのおやじは・・・。』昭男は一方的に話し続ける父を前に混乱を極めていた。

（つづく）